
僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

【Zコード】

Z0980BA

【作者名】

まり

【あらすじ】

工藤愛子は独りだった 一年の終わりに転校してきた愛子は、教室空氣に耐えられず屋上へいきお弁当を食べることに そしていざ食べようとすると突然、屋上の扉が開いた
そこで初めて僕の恋は始まった

田舎じ（前書き）

一作目です

明久×オリ予定が愛子に

別に愛子は好きだからこれでいいのですけどね

それではどうぞ

出会い

その出会いは突然で、だけど優しくて、嬉しくて、僕の初恋になつたんだ。

ホントに好きになつて毎日気付けば彼のことばかり考えていたよ。
その時あつたことは、別にたいしたことないんだけどね。
いまはそんな彼と結婚して幸せな家庭を築いている。ちょっと忘れ
んぼうだけどね。でもそれがまたいいんだ。

「いつてさがーす」

「いつてらっしゃい あつまたお弁当忘れてる」

「あれ?
ホントだ
いつもゴメンね」

夫婦だしそれくらい」「いいよ

「ヤあ呑んでいいやもんか」

えりてあるのギスは?

……わが、たよ（や）

「えへへへへへ」

「じやあいひわあす、
波子」

「いつてらつしやい、明久」

そう僕はバカで有名だった吉井明久と結婚しました。
このお話は僕たちが結婚するまで、どんなことがあったか工藤愛子
改め吉井愛子視点の話です。

出会い

「工藤愛子です もう一年の終わりだけよろしくね」

僕は文月学園つていう不思議な制度をもつた学校へ転校してきた。
試験召喚制度つてよくわからぬいやつ。一年生になつてから使うら
しいんだ。

でも僕は今一番友達が欲しい。だつて何もできないもん。一年の最
後だけあつて皆、仲のよい友達がいる。

ハツキリ言つて羨ましい。多分、数日間は誰からも話しかけられな
いからなあ。

まあ半日経つた時、つまりお昼の時間。友達がいない僕は独りでお
弁当を食べることになる。皆は机をくつつけあって食べていた。

「（僕一人だけ浮いてるよね……）」

結局、空氣に耐えられなくなつて僕は屋上で食べる事にした。

キイ

屋上の扉を開けると広くて青い空が視界を覆つた。とても晴れやかな気持ちになる。

僕はベンチに座り独りお弁当を——

「あれ？ 先客がいる？」

——食べよつとしたら誰かがきた。ビートでもこその普通の子、でも顔は少し可愛い？ もしかれない

「君、初めて見るけど転校生？」

「うふ トト藤愛子です よろしく」

「一人つたりとま」
僕と一緒にお弁当食べる？

「えつ……」

なんで？ なんでイキナリそんなことまでのぞ。

「僕の名前は吉井明久 ようじへねトト藤愛子」

「…………」

突然のことに対する反応できなかつた。

なんで？

なんで？

なんで初対面の僕を誘つてくれたの？

ツウ

涙がでた。

「えええ！？ なつなんで泣くの！？」

わからない。なんとかしらぬけど涙がでたんだもん。別に悲しくはないよ。だつて——

「嬉しい 嬉しいよ吉井君」

ギュウ

衝動に駆られて吉井君に抱きついた。

「わわつ ちよつ抱きつくなはーー

「お願い もう少しだけこのままでさせせて

僕はいま泣いている。嬉涙を流している。ホントは今すぐに一緒にお弁当食べたいのに泣いた顔を見て欲しくない。

僕の体は震えていた

「……わかったよ こつまでも待つよ」

吉井君はやう言つて優しく僕を抱いてくれた。吉井君の体温が直に伝わってすぐ暖かい。それですぐ落ち着く。

僕はそれから長い間吉井君に抱きついたままでいた。

キヤドキヤドキヤドキヤドキヤドキ

胸が高鳴つてゐる。ちゅつと甘つて。

これが恋かな？

いつもして僕の初恋が始まった

別れ（前書き）

明久の過去が少しでます

それではどーぞー

別れ

しづらしくして僕は泣きやんだ。でも顔をあげる「」とはできなかつた。
だって男の子の胸で泣いたんだよ？

恥ずかしいし、泣いてたから目がきつと赤くなつてゐるもん。
それにもつと吉井君の体温を感じたい。

「泣きやんだみたいだね？ ならそろそろ……」

「……うん」

無情にも吉井君の方から言つてきた。まあしかたないよね。いつまでも抱きつかれたら嫌だろうし。
そう思つて僕は吉井君から離れた。

「大丈夫？」

「うん ありがとう」

「じゃあお弁当食べよっか」

「……うん」

僕たちはお弁当を食べ始めた。だけどお互い話すことなく、ただ時間だけが過ぎていく。
何か話さないと。

「『』」
「ゴメンね吉井君」

「ムグムグ 何が？」

「僕につき合わされてお弁当食べるなんて嫌でしょ？」

「パンクン 別に むしむ……何でもない」

吉井君はそこで話を切ってしまった。また時間がだけが過ぎていく。
えつ？えつ？どうすればいいの？

「……明日も一緒に食べる？」

「えつ……？」

「いついま何て？」

また一緒に食べてくれるの？

「嫌ならいいよ 早くクラスに馴染まないといけないからね」

「ぱつ僕は大丈夫 でも吉井君は？」

僕につき合わされるなんて迷惑に決まってるよ。吉井君にだって友達はいるだろ？
また僕と一緒に食べなんてしなくてもいいんだよ？

「僕も大丈夫 少なくとも工藤さんが友達を見つけるまでは毎日でも一緒になるよ」

「……ありがと」

あつまた泣きそうになってきた。吉井君はズルイよ。僕にとって嬉

しい言葉でしか言わないんだもん。

こんな吉井君はきっとモテるんだねうな。

「ねえ吉井君 吉井君には彼女つているの?」

「はん？」

うわああああ / / / / /

なんてこと聞いてる僕!？」これじゃまるで吉井君に気があるって言つてゐよいつなもんだよ。

「彼女？」
「いないけど、ひしだもんのこと聞くの？」

「えつとその一興味本意?」

「ふ」

ふうなんとかバレなかつたかな？でもバレてて何も言わないのかも
しない。

キンコーンカーンコーン

「あつもうクラスに戻らなきや」

えつせん.四二九。

「じゃあね工藤さん　また――」

「うん バイバイ

「——また……いや 次の休み時間にでも僕が会いにこくよ ジャ

あね

「ええええええええええ————————！」//

僕の叫び声が空に響いた

side 明久

「僕が会いにこくよ

何を言つてるんだ僕は？

別に嘘を言つたじやない。ただホントに工藤さんに会いに行つて少しでも居ずらい教室から連れだそう。そう思つた。

でも工藤さんは自分の力でクラスの人と馴染まなきやいけない。それを考えていたからこそ、あんなこと言つつもりはなかつた。でも僕は口にしてしまつた。

□にしなきやならない気がした。

「あの時の僕と工藤さんを重ねていいのかな？」

僕も昔、転校してきて同じことを味わった。だから工藤さんの気持ちはよくわかる。

寂しくて。

悲しくて。

誰かに助けて欲しくて。

「工藤さんは僕が助けたのか……」

僕も助けてもらつた。その子とは友達になつていつも一緒にいた。中学の卒業の時に別れちゃつたけど、いまも大事に思つてる。

でもそれは一年以上一緒にいたからであつて、もうすぐ一年が終わり一年生になる。その時に振り分け試験があるけど多分同じクラスになれない。

「だからって助けない訳にはいかない

辛い別れになれそうだな。

そう思うと胸がキュウと締め付けられた。

本当の恋れ（前書き）

悲しめです

それではどうぞ

本当の別れ

「（次の休み時間に僕に会いに来るって言つてたけど、吉井君はホントに来るのかな？）」

次の休み時間が待ち遠しかった。早く授業終わらないかな。そう思つてチラシと時計を見るけど全然進んでない。待っている時間が長く感じるのはけよつと憂鬱^{うきょく}。その間、吉井君のことを考えると胸がドキドキする。やっぱり好きになつたのかな。

キーンゴーンカーンゴーン

待ちに待つた休み時間になつた。吉井君、来てくれるかな？

ガラッ

「ここに工藤さんつている？」

あつ吉井君。来てくれたんだ。そのつ僕に会いに／＼／＼／＼

『工藤？ 転校生の？』

「やつだよ 工藤さんに用があるんだ」

「よひ 吉井君／＼＼＼＼＼

「工藤さん 言つた通り会つてこ来たよ じゃ あがよつと外出よひへ。
工藤さん借りてくよ?」

『あひああ どひが』

「行ひうか工藤さん」

吉井君は僕の手を掴んで教室の外へ連れていった。
つてええ! ? いきなり手を／＼＼＼＼＼

吉井君つてプレーボーイなの! ?

「違ひよ」

「えつ! 何でわかつたの?」

「……声に出てた」

嘘つ一聲に出てたんだ。また恥ずかしい思いしちゃつたよ。それに
吉井君に失礼だよ。

「うひ、ゴメンね」

「いいよ 気にしない

吉井君は僕を教室から離れてない所へ連れてきた。一体どひし
たんだる? .

「明日には僕はこりなくなるてる

「えつ？」

何言つてゐの？…どうこいつ意味？
なんで吉井君がいらなくなるなんてことを言つの？

「あんな風に連れ出したらきっと僕と何かあつたのか聞かれる そのときにちゃんと話ができるれば友達ができるでしょう？」

「あつ……」

もしかして吉井君はそこまで考えて手を掻んだの？僕はただ約束を守つて来てくれたとしか思つてなかつたのに。

「友達ができればお弁当もクラスの誰かと食べられるでしょ？ 僕は明日からりりないよね」

「そつそんことないよー まだ友達ができるかもわかつてないの」

「…」

「今日友達ができなかつたら何時できるの？」

「それは……」

「工藤さん 大丈夫だよ あつとできるわ」

確かに吉井君の言つ通り今日できなかつたら何時までもできなこと思つ。思つ。

でも友達ができたら吉井君に会えなくなつちやつ。ビリコナ。

「話はそれだけ じゃあね

「あつ待つてー！」

僕の声は聞こえてるハズなのに吉井君は振り返りずに戻つていった。

迷つたらダメだ。吉井君は僕にチャンスをくれたんだ。吉井君の気持ちに答えるためにも友達を作らなきゃ。

そう決意して僕は教室へ戻つた。

教室

『あつ戻つてきた』

『ねえ 吉井君とどういづ関係なの？』

僕は教室に戻つたら皆に質問攻めにされた。僕はそれに見合つた答えを述べていった。それだけで友達になろうって言ってくれる子もいた。

でもこれで吉井君とは会えなくなつた。

いやつ会わなくちゃ。だって僕まだ吉井君にお礼言つてないもん。次の休み時間、僕が会いに行く。そしてお礼を言つんだ。

ありがとう。

いよいよ休み時間となつた。あつでも吉井君のクラス知らないや。

聞いちやえばいいか。

僕はさつき友達になつた優子に聞いてみた

「優子、吉井君ってクラスわかる?」

「吉井君? たしかCクラスだつたと思つわよ」

「そつか ありがとう」

早く吉井君の所へ行かなくぢや

「ねえ 吉井君いる?」

（クラスに着いてすぐに僕は聞いた。会つてお礼を言つだけなのに必死になつてゐる自分にビックリだよ。僕の質問には赤髪の男の子が答えた。

「明久？ つてことはお前工藤か 残念だな、明久はいない いな
いつてようお前に会う気がないか」

「！ 何で会う気がないの！」

「明久から伝言だ 『友達は作れた？ なら僕なんかと仲良くする必要はないからね、一度と会わないようにするよ 頑張ってね』だ
そうだ」

「吉井君…… 別に会うくらいいいじゃん」

「工藤、お前からは伝言ないか？」

赤髪の子は僕にそう聞いた。

あるよ。あるに決まってるじゃん。

「吉井君にありがとうって伝えて」

「ああ わかった」

お礼は直接会つていいたかつたけど吉井君は僕に会わないので伝言になつたけどしかたないよね。

僕は自分の教室へ戻りつとした。吉井君と会えないならここにいる必要はないしね。

「もしも もう一回会話があるのだった」

「…」

「たしか『別れが辛くない』よつて会わなかつた『ゴメンね』だ」

僕は振り返らずにそのまま教室へ戻つていった。
でもそのまま帰らずにトマトで寄つて一一泣いた。

「辛くともいいから、それでもいいから会いたかつた　会いたかつ
たのに……」

そんなのあること

「次会えたら、僕から逃げないで……」

転校初日から僕は出会いと別れを味わった。それは長い間一緒にいた友達と離れるくらい悲しかった。

その想いを胸に僕は一年生になった

本当の別れ（後書き）

次はもう一年生になつたところからです

吉井君は悲しきなごの？（前書き）

「ハコの血」投票しながらだと書いてていいのです

それでねどーん

吉井君は悲しくないの？

僕が文月学園に転校して初めての春がきた。校舎へと続く道には桜が咲いていて、心を奪われる。とても綺麗だ。でも僕にはそれより気になつていてることがあり、急いで校舎へ向かつた。

「おはよう、工藤」

「おはようございます、西村センセ」

この人は鉄人こと西村先生。トライアスロンを趣味とする「ゴツい」先生なんだ。

「ほら、振り分け試験の結果だ 受け取れ」

「ありがとうございます」

僕結構頑張ったからなあ。イイ線いつてると思つんだけど……そう思つて結果の書いてある紙を見た。

工藤愛子……Aクラス

「よく頑張つたな おめでとう」

「ありがとうございます やつたAクラス」

きっと優子も一緒にクラスだね

「うむ 工藤は転校したての時と比べてずいぶん変わったな

「やうですか？」

「最初は少し心細い感じがあつたが今はハキハキしている いい友人ができたな」

確かにいい友達はできた。優子は勉強もできるしスポーツもできる。性格にはちょっと難があるけど基本優しいし、からかうと面白い反応をする。

でも西村先生、元はといえば——

「それは吉井君のおかげです」

「吉井？あのバカがか？」

「はい 最初クラスに馴染めなくて一人でお弁当を食べよつとした時、一緒に食べる?つて吉井君が誘ってくれたんです」

そうだよ。今の僕があるのは吉井君のおかげなんだ。あの時はすぐ助かつたよ。

……なんかす”ぐ会いたくなつちゃつた。

「ほお あの吉井がなあ

「それにクラスの人と仲良くなれたのも吉井君のおかげなんですよ？」

「そうだったか 吉井はただのバカだと思っていたが、そういう一面もあつたか 今度から吉井に対する接し方を変えるかな？」

吉井君は一年の最後に観察処分者になった。でもそれはきっと誰かの為にやつしたことだと僕は思つてゐる。

「バカだからこそ人にに対する優しさもある、それも吉井君の良いところです」

「そうかもしけんな」

「やつですよ ジャあ僕は行きますね」

「ああ 一年間頑張れよ」

そろそろ教室に入らうと思つて話を切り上げた。色々吉井君の話をしたら別れの時を思い出した。

あの時、僕を辛くさせないために吉井君は会わなかつたけど……

吉井君自身はどうだつたのかな？

「西村先生 吉井君はもつ来ましたか？」

「いや、まだだが？」

「なら一いつ伝言をお願いします」

「わかった
何だ？」

僕は深呼吸してこう言った。

“吉井君は僕と別れて悲しくなかつた？”です

「うむ。しかし、どうも、おへそへおかえりなさい」と、

僕は疑問に思つたことを伝えてもらひついとして、今度こそ教室へ向かつた。

S i d e 明久

正直言ひとあやつてこる。

登校時間を大幅に遅れた上に玄関には鉄人が立っている。まずい、これは非情にまずい。

一吉井、遅刻だぞ」

「すんません許してください」

とりあえず下座で機嫌をとらひとした。

「何だ？頭を下げて踏んでほしいのか？」

「すごいS発言！ あんたはそれでも教師か！？」

生徒の頭を踏むつてどんな脳してんだ? やつぱり脳まで鉄でできてるんじゃないの?

「振り分け試験の結果だ 受け取れ」

「あっすいません」

いつもより解けたからなあ。十問に一問は解けたからCかDってところかな？

吉井明久……Fクラス

「ば……かな」

「お前は観察処分者になるほどバカだ Fクラス以外ありえない」

「傷ついた！ 今の言葉で深く傷ついた！」

「いつもと違つて精神攻撃！？
やることがエグいぞ！」

「それは困る お前の優しい心は傷つかれたらイカン」

「はっ？」

鉄人が僕の優しい心を心配した？

吐き気がするわ！
気持ち悪！

「誰に思考のプログラミングをしてもうつたんですか？」

「一体鉄人に何が起こった！？」

「前言撤回 お前に優しい心などない」

「やつぱりな。鉄人が僕を心配するワケない。あつたとしたら天変地異だ。」

「まったく 折角いい話を聞いたと言つのに」

「いい話？」

「お前が工藤のこと助けてやつたという話だ 感謝してたぞ」

「！ …… 工藤さん」

「僕に感謝する必要ないじゃないか。結局は工藤さん自身の力で友達もできただんでしょう？」

「僕はキッカケを作つただけなんだ。感謝なんてそんな——」

「それともう一つ 工藤から伝言だ」

「伝言？ 僕に？」

「ああ “吉井君は僕と別れて悲しくなかつた？” だそつだ……」

「吉井？」

「すいません、失礼します！」

僕は鉄人から走って逃げ出した。走りながら先刻の言葉を頭の中で何度も反復した。

“吉井君は僕と別れて悲しくなかつた?”

僕は立ち止まって息を整えた。

そして近くにあつた柱を殴りつけでこう言つた。

「悲しくなかつたワケないよ!」

短い間だつたけど工藤さんと僕は同じ思いをしていて、親近間が湧いていた。それでも僕みたいなバカと一緒にいたら駄目になると思つて別れた。

それはまるで長い間一緒にいた友達と別れるくらい悲しかつた。

柱を殴つた痛みじやなくて胸を締め付ける痛みに僕は涙を流した。

吉井君は悲しくないの？（後書き）

胸が苦しくなつた方
ありがとうございます

苦しくならなかつた方
もつと頑張ります

■余白はどこで選択（前書き）

今日は普通です

それではどうぞ

再会には苦しい選択

s.i.d.e 明久

「……このバカでかい教室は何？」

普通の五倍の広さはある。これが噂のAクラスなのか？ 中をちょっと覗いてみよう。うわっ！リクライニングシートに個人冷蔵庫に空調、パソコンってそこまでやる？ まるでホテルじゃないか。

「木下優子です 趣味は——」

ふーん。今は自己紹介か。皆やつぱり頭よそいだなあ。 つと次は……！？あの黄緑色の髪。まさか……。

「工藤愛子です 一年間よろしくね

「なつ……！」

やばっ！声だしちゃった。逃げよう。

僕はその場から逃げ出した。まさか工藤さんがAクラスだなんて……。

「（ガラッ）吉井君ーー？」

何で教室から出でてくるのーー？余つりはないんだ！ 君は僕と関係をもっちゃ駄目なんだよ。ましてAクラスなんてなあさらだ。

「吉井君……何で僕から逃げるの？」

「うー……くそつー！」

工藤さんの言葉に胸が痛くなつた。
違うよ。逃げるんじゃない。これは工藤さんの為なんだ。
だから……だから僕をーー

「そんな悲しい顔で呼ばないでよ……」

そのまま僕はFクラスまで逃げ込んだ。

「（ガラッ）ハアツハアツ 遅れました」

「早く座れウジ虫野郎！」

「雄一か……先生がいないなら大丈夫だね」

「？ いつもの明久ならリアクションがあるはずだが……」

席は自由みたいだ。空いている一番後ろの席に座りつ。
カバンを置いて息を整える。それと同時に工藤さんの言葉を思い返す。

『何で僕から逃げるの？』

「…………言えないよ」

僕は誰も聞き取れないような小さい声で工藤さんの言葉に答えた。
自分にだけわかる真意に頭を悩ませて担任の先生が来るまで孤独に
工藤さんのことばかり考えていた。

s.i.d.e 愛子

「吉田さん進級おめでとうござります 私はこの一年A組の担任、高
橋洋子です よろしくお願ひします」

僕たちの担任は知的女性の代表のような人だった。

「まずは設備の確認をします ノートパソコン、空調、冷蔵庫、リ
クライニングシートその他に不備がある人はいますか？」

あはは。これで不備があるって人はいないんじゃないかな？贅沢す
ぎるような気がするんだけど……。

「不備はないようですね それでは順に自己紹介をお願いします」

あーやっぱりあるんだ。少しは期待してたんだけどな。

でも僕はもう大丈夫。だって吉井君のおかげで変わったからね。

「——それでは次の人、お願いします」

僕の前にいる優子の自己紹介が終わって僕の番になった。
まあ普通に趣味とか言えば問題ないよね。

「工藤愛子です 一年間よろしくね」

『なつ……！』

あれ？今廊下から声がしたような……。気のせいかな？
気になって廊下を見てみた。

「…………え？」

そこには窓越しに僕を見て驚いた顔をした人がいた。あれってまさ
か吉井君？

その人はその場から走り去つていった。まるで何かから逃げるよう
に。

僕は吉井君なのか確認するために急いで教室から出た。

「（ガラッ）吉井君！…？」

逃げるように走る人が僕の呼びかけに反応してチラッと僕を見た。
間違いない、あの顔は吉井君だ。でも何で逃げるんだろう？折角会
えたのに……。

もしかして僕に会いたくないの？

その疑問は僕を悲しませた。悲しくて涙がでそうになるくらい苦し
ませた。それと同時にそんなハズないと聞かせて、吉井君に聞
いた。

「吉井君……何で僕から逃げるの？」

吉井君はまた反応して僕を見た。振り返ったその顔には悲しみに溢
れていた。

僕から逃げているのが悲しいの？なら何で逃げるの？

そのまま吉井君はFクラスの教室まで走つて逃げ込むように入つていった。自己紹介の途中だつたし僕は諦めて教室へ戻つた。

「……逃げるならあんな顔しないでよ」

戻る途中ポツリと言つたその言葉は誰もいない廊下に静かに響いた。

s.i.d.e 明久

「雄一、相談があるんだ ちょっと廊下まで」

「別に構わんが」

僕は自己紹介の途中できた姫路さんが腐つた畳や隙間風がヒドイ窓の教室にいるのは可愛そつだと思つて雄一を誘つた。

「で用は何だ?」

「姫路さんがこんな所にいるのは可愛そつだから試合戦争を起しちたい」

「何? 試合戦争だと?」

僕は無言でうなずき——

「それもBクラス相手に」

と言つた。

「なんでBクラスなんだ？　そこまで狙つならAクラスだろ　何か理由でもあるのか？」

「だつてAクラス相手じゃ「嘘だな」勝てるわけって雄一！　最後まで言わせてよ」

「ホントは違うだろ？　俺には何かを守つてるよう見える　誰か知り合いがいるのか？」

その言葉にグサツときた。確かに僕はAクラスには工藤さんがいるつて考えた。工藤さんにこの教室を使ってほしくない。そう思つていた。

だけどあえて口にはしなかつた。

「別に　ただ実力的に無理だと思つただけだよ

「どうか　でも悪いな、俺はAクラスを倒したい　勉強だけが全てじゃないって思わせるためにな」

「雄一、それだけは止めてくれないかな？　頼む」

「姫路の実力はAクラスだ　可愛そうだと思つならAクラスにするべきだろ」

「そうだけど……」

「でもそれで勝つたら工藤さんが……。

「自分勝手なこと言つた 誰もできるなりAクラスだと云ひはゞだ
それが駄目なら俺は乗れない」

「…………わかった Aクラスをやひつ」

「（）（）（）やひつと決まれば早速説明するぞ」

雄一はやうこつてEクラスに戻つてこつた。多分Aクラスと戦うときには藤さんと戦うことになるだらうな。それが敵同士だなんて……。

「感動の再会にはならないな」

僕は再会には苦じて選択をしてしまつた。

敵かあ（前書き）

展開はやい？

そんなことありませんよね？

それでばざーざー

敵……かあ

「私たちCクラスはAクラスに試合戦争を申し込むー。」

つてCクラス代表の小山さんが言つてきた。優子のことを睨みつけてたけどどうしたのかな?正直AクラスとCクラスじゃ実力が違うから意味ないと思つけど……。

「勝者、Aクラス」

ほらね。予想通り勝つたよ。

そういうえばFクラスもDクラスとやつて勝つた後、Bクラスとやつてるみたいだけど……まさかね?
そう思つてたけど……。

「……Aクラス代表はいるか?」

こういう時つてどう反応すればいいのかな?卑怯で名高い根本君が女装してやってきた。その顔は絶望の色に染まっている。
つてことはFクラスが勝ったんだ。そうなると次は僕たちとやるつもりなのかな?そつだとしたら吉井君とは敵同士で再会することになるのか。

「……おえ」

とりあえず根本君が来てから上まらない吐き氣をなんとかしよう。

「一騎打ち？」

「ああ Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「何が狙いなの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

恒例の宣戦布告。対談してるのは優子とFクラスの代表。優子はこういう得意だから率先してやっている。Fクラスは他にも数人来てるみたいだね。

そこには吉井君もいた。とても気まずそうにしている。僕が視線を向けたらチラッと見て顔を逸らした。

顔を逸らすってことは僕のこと意識してるってことだよね？吉井君は何か理由があつて僕と会いたくないだけなんだよね？

「それならこっちから行くからね」

意を決して僕は吉井君へと足を進めた。

工藤さんがこっちを見た。あーもう、僕は来たくないって言ったのに雄一の奴「この戦争のキッカケはお前なんだから」とかいって上手く丸め込みやがって。

つて工藤さんがこっちきてるじゃん。これじゃあ今までの苦労がパージじゃないか。雄一、後で覚えてるよ……。

「吉井君、ちょっとといいかな?」

キターネ…せつばこよどひしおりこれ…ビヒリよつこれ…とつあれずア承するべきなの?

『『『ひむせーよー… わたると行け!』』

天使と悪魔に罵倒された!…くつ…仕方ないか……。

「別にいいよ」

「じゅあー人きりになれるところに行こつ」

一人きりって……大事な用事ってことだよね?つまり僕が工藤さんを避ける理由とか鉄人に伝言までしたことの答えかな。

ガラツ

僕たちはAクラスから出て話しことにこなった。

「单刀直入に言つよ 吉井君、何で僕から逃げたり顔を逸らしたりするの?」

「やつぱり……。ここまできたら諦めて全部話そづ。

「理由は簡単だよ 僕が観察処分者で工藤さんがAクラスだからさ
僕たちが馴れあってたら工藤さんまで田をつけられる そんなこ
とさせられないよ」

「じゃあ僕のこと嫌いになつたワケじゃないんだね？ よか
つたー」

「くつ？」

もしかして僕が工藤さんのこと嫌つてゐからそんないとと思わ
れてたの？ それは何といつか……すゞこに誤解だね。

「もー毎日が気が気でなかつたよ

「毎日つて僕のことそんなに思つてたの？」

「えつこやつあのつ……まあ、ね／＼／＼／＼

動搖した工藤さんはみるみる赤くなつた。うーん言葉の選択ミスつ
たかな？

「じゃあもう一個質問 西村先生から伝言してもうつたと思つけど
僕と別れて悲しくなかつた？」

「それは……そりゃ悲しかつたよ」

「じゃあ今まで会つてくれなかつたの？ 悲しいなら普通会つ
でしょ？」

それはそうだけど。でも——

「——でもあの時問題児だつた僕が一緒にいたら、きっと工藤さんは「勝手だね」……え？」

工藤さんは目に涙を浮かべていた。それでも真っ直ぐ僕を向いていて決心した顔をしていた。
でも勝手って……。

「そこには僕の気持ちも吉井君のホントの気持ちも入つてないよ
僕のことを考えてくれたなら僕の気持ちを第一に考えてよ！」

その言葉にまた胸が痛くなつた。図星だつた。僕は工藤さんの気持ちを無視して自分を通していた。

「僕は吉井君に会いたかつた また一緒にお弁当食べたりしたかつた 吉井君にありがとうって直接言いたかつた

「…………」

「僕に会わなかつたのも吉井君の優しさつて分かつてたけど、でも
僕はそれでも会いたかつたんだよ」

「…………」「メン」

「謝るくらになら最初からそんな」としないでよー。うつ うつ うつ
ぐすつ うふーんつ ひぐ

「ギャウ（ホント）ジーメン」

感情が溢れだしたのか工藤さんは泣いてしまった。そんな彼女を僕は優しく抱きしめた。

「僕も工藤さんに会いたかつた
だけど自分の気持ちを抑えてた」

そんなの、歌だよ。ちせんと僕でない

「うん、次からは逃げないよ、約束する！」

「絶対だよ？」

「うん」

「そろそろ戻る？ 対談も終わってるだろ？ し……」

「そうだね」

そう言ってAクラスへ足を運ぶ。とりあえず赤い顔は隠せたかな。
そこでフツと思いついたように工藤さんが――

「あつ！」

と声を発した。

「どうしたの?」

「折角一人なんだからお礼言つといつと思つて」

「別にいいよ」

「いいじゃん ね、目閉じて」

お礼をするのに何で目を閉じなきゃいけないんだろう。そう疑問に思つても従つて目を閉じた。

「今更言葉でお礼言つのもなんだし……ね

その言葉を聞くやいなや僕の唇に柔らかくて少し湿つた感触があつた。押しつけられるような吸いつかれるような感じに戸惑いながらも何が起つたかわからなこまま囁きよつて歯を押しつけた。

「んんっ」

工藤さんの甘い声がすぐそばで聞こえた。そしてよくわからない感触は惜しむように離れていった。そこで目を開けると僕と工藤さんの唇を繋ぐ一本の銀色に光る糸ができていた。
まつまさか……これつて……。

「吉井君結構大胆だね でもキス上手だつたよ」

恥ずかしそうに僕を見ながら頬を赤らめる工藤さんを見て意識が飛んだ。

バタンツ

最後に覚えてるのは顔の痛みと廊下の冷たさ、そして柔らかいあの

感触だけだった。

敵かあ（後書き）

やつすがあましたかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980ba/>

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

2012年1月5日18時52分発行